資料13

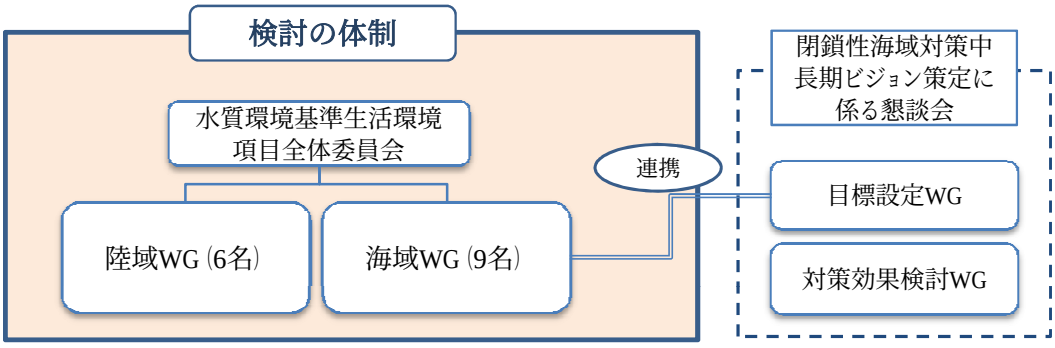
水質環境基準（生活環境項目）に係る見直し検討について

水質環境基準生活環境項目の設定から35年経過し、水環境の状況が変化する中、環境基準の達成状況だけでは水環境の実態が分かりにくく、環境保全活動の推進等につながりにくいとの指摘がある。また湖沼法の改正や第6次総量規制の検討の際にも、水環境の目標のあり方が課題としてあげられており、このような課題への対応の検討のため、平成18年度より表記検討を実施している。

背景

・国民の水利用の多様化
・湖沼、閉鎖性海域における環境基準達成率は、近年横ばい
・改正湖沼法の附帯決議や第6次水質総量規制に係る中環審答申における指摘
・三位一体改革による水質監視補助金の廃止とそれに伴う常時監視地点の減少
等

検討の体制



検討の内容

[H19における検討事項]

・アンケート調査から利水障害があるとされる水域での既存の水質基準項目による水質評価の現状を整理した。

海域、陸域（河川・湖沼）毎に代表的な水域を設定し、既存の生活環境項目の課題等について検討した。

[海域]

・海域における環境基準項目（COD等）と内部生産（クロロフィルa）や透明度、下層DOの関係を調査し、既存の環境基準項目が海域の状態（酸素消費、清澄さ等）を適切に把握できるかについてて検証した。
・透明度、下層DOについて、CODとの相関が低い事が分かった。

[陸域（河川・湖沼）]

・陸域におけるBOD、CODと透明度、表層DO、下層DO、TOC、クロロフィルa等との関係を検証した。透明度等についてはBOD,CODと必ずしも明確な相関はなかった。
・大腸菌や、N/Pバランス、アンモニアなどの新たな項目について検討した。
・湖沼やダム、堰の湛水域などの停滞水域における水質の特徴を検証した。

[今後の検討課題（案）]

[海域]

・透明度、下層DOの状態を表す指標としての検討。
・海域における有機物を把握することの目的、現状の課題に対する最適な指標の検討。
・底泥からの栄養塩溶出と表層における内部生産との関係等の検討。

など

[陸域（河川・湖沼）]

・透明度、大腸菌等の新たな指標の検討。
・河川、湖沼における有機物を把握することの目的、現状課題に対する最適な指標の検討。
・湖沼における底層DO、難分解性有機物の実態把握、測定及び制御の必要性検討。

など